第１回　斐伊川放水路環境モニタリング協議会
議事概要

○資料-2 についての意見

会長：最大分流量が 2,000m^3/s となっているが、S47 年 7 月の洪水でも対応が可能なのか？
→事務局：S.47 年 7 月の出水でも、家屋浸水が起こらないように計画しているため、対応は可能である

○資料-3 についての意見
委員：資料-3 の P12 の評価結果を受けて P42 の課題が抽出されているが、現状について再度整理すれば、今後の課題はこれだけでないのではないか。
アセスの調査範囲から実態に合わせた絞り込みが必要ではないか
委員：拡幅部については色々と手当されており、評価できる。
委員：P12 の調査結果では、立久恵峡にしかいない昆虫が挙がっている。当時の調査範囲は広く、現状では意味がない。現在の環境からは、拡幅部の河川敷や堤防の草地環境や、河口部の砂丘環境が重要であるので、現状にあった重要種を調査する必要がある。
委員：資料-3P12 の整理の仕方としては、アセス書の評価のみでなく、現状を踏まえた評価を行い、課題を抽出する整理が必要ではないか。
→事務局：過去からの継続性を踏まえ、委員の指導をいただきつつ現地調査計画を策定する。
委員：放水路の河床がコンクリートの部分はどこまでか？
→事務局：コンクリート合流部手前の放水路に架かる橋の上流くらいまでであり、その下流はフトン籠とブロックが交互に施工されている。

○資料-4 についての意見
会長：分流により N、P が変化する。流入負荷について L-Q 式を求める出水時調査が必要ではないか。
→事務局：今後検討する。
委員：代表種としてシジミ、アユを調査してくれることは水産としてはうれしい。調査方法は十分検討すること。ワンドの調査についても、調査計画が重要となるので、他の事例も参考に計画すること。
委員：調査地点を追加すべきである。放水路合流手前の背水部の浅くなっているところは、水草や藻が生えている。浅くなっているところを追加する。ここは、藻や魚を食べるカモ類やコハクチョウなどの鳥が多い。また、調査地点は拡幅前を前提としてい

るので新たに形成されているので、うすくてよいので全域で調査する必要がある。
馬木の上流や河口の海域も入れるべきではないか。

→事務局：放水路の背水部は調査対象とする。調査計画については、担当の委員に指導をいただきつつ策定する。

委員：昆虫は発生期が短い。昆虫は特定の植物と結びつきがあるので、植物調査時に、たとえばミヤコグサ、ウマノスズクサなどの植物の分布を記録する。

委員：斐伊川本川では、洪水を抑えることで中洲に草が生えるなどの環境変化が予想されるので、斐伊川本川についても調査する。

→事務局：今回のモニタリングは、拡幅部と開削部を対象としており、斐伊川本川は対象としていない。

会長：対象とならない。

委員：了解した。

委員：シジミやアユの調査内容は、目標が高くかなり困難と思われる部分がある。調査量も大きくなりかねない。また、シジミ調査の対象はヤマトシジミとするのか。

委員：アユの産卵場から稚アユが海の降下する時に神戸堰を降下しているのか解明されていない。漁協としても気になることである。

委員：昆虫は発生期が短いので、5,7,9 月の調査では 6 月が抜ける。ゲンジボタル、サナエトンボなどが確認できないので。別途調査して欲しい。

→事務局：詳細な調査計画については、各担当の委員に指導をいただき策定する。

委員：神戸川の拡幅部は、堆積傾向となることが予想されるので、ワンドの形状変化について経年的に細かく調査する必要がある。また、水文調査により、小規模の洪水が増えるのか、大規模の出水が増えるのか履歴も含めて検討する必要がある。
合流部は 3 つの河川が合流するので、河床変化の予測が困難である。平面的な測量の実施も必要かもしれない。

→事務局：定期横断測量は実施している。ご指摘の内容については、今後検討する。

→清家会長：専門の委員の指導をいただき、モニタリング調査計画を策定し、調査を進めること。

以上